

<特集 巻頭言>

近代のゆらぎ—芸術と宗教におけるプリミティヴィズム

石倉和佳

本誌第3号は、「芸術と宗教におけるプリミティヴィズム」をテーマとしたものである。このテーマは近代を腑分けする一つの行き道を示している。プリミティヴィズムはしばしば、最も初期のものが最も純粋であった、といったセンチメントとともに登場するが、間違っではないのは、その本質が歴史をさかのぼり過去から現在までの進歩を辿ることにはないということである。プリミティヴィズムは歴史性をまわりつかせている。しかしそれ自体は歴史ではない。それは、過去から現在まで続いた進歩の足跡から、あるときは発作的に、もしくは逃避的に、あるいは決別を込めて、始原へと跳躍する精神の在り方である。物質的豊かさや文化的精錬を求める文明の中で、人々はその幸福と生命の充実感において十分ではない、むしろ絶望的に何一つ得られないと感じる瞬間は決して虚構ではない。その時プリミティヴィズムへの誘惑は、一筋縄ではいかない程に人を惹きつけるだろう。しかし気をつけなくてはならない。すでに誰にも分からなくなってしまった「始まりのもの」について、強い想像的表象を抱くことからプリミティヴィズムが生まれるのだとすれば、そうした強度の表象は、イデオロギーの高揚と意味の完全な欠落との間を浮遊する運命にもなるだろうからだ。

ここでプリミティヴィズムと呼んでいる近代に特徴的な精神の運動は、歴史的に堆積したものを所与のものとし、かつ、そこに足場を持つ自己を一旦否定する身振りにおいて、矛盾、すなわち対立する力を含む。そしてその力は、より大きな近代社会の時間的経過の中で、何らかの平衡的位置へと収斂していこうとする。こうした力学的分散から調和へと繰り返す運動を考えれば、それはゆらぎをはらむ現象であることが分かる。そのゆらぎはさざ波のようなものであったり、大嵐となって物事を根底から変えてしまったりするのだが。近代が文明の進歩というテーゼに乗って進行するとすれば、近代の成立とともに胎動を始めたプリミティヴィズムへの志向は、時にその振幅を広げ変動をもたらすものともなったのである。

キリスト教の発展史から見れば、原始教会へと回帰しようとするプリミティヴィズムは、単なる一時の現象的なものに終わらない。紀元 1 世紀の時代の信仰を保持しようとする人々もいれば、何世紀にもわたる教義の精錬を経た宗派の集合体もある。三位一体の教義を異教徒の思想に影響された墮落だと考える人々もいれば、信仰の骨格だと考える人々もいる。後者の人々にとっては、もっとも初期の信仰の形が最も純粹であるというプリミティヴィズムを信ずる人びとは、迫害し、弾圧し、抹殺すべきものであった。純粹を求める心が最も汚らしいものに見える—このようなかかさまの世界は、近代のもつ裏側の顔の一つだろう。

19 世紀後半から西洋美術史に現れるプリミティヴィズムの潮流の背景にあるものは、遠く離れた土地や島々にいる「未開」の人々の工芸美術が知られるようになったという事実ではない。西洋美術の伝統にしながら、それらの手作りの品々からインスピレーションを得た造形や線描や色彩を創作する中に、西洋の伝統を破壊する力を想像する熱量が潮流を作ったはずである。しかし最初のインスピレーションの起源は、瞬く間に忘れ去られる。大事なポイントであるが、起源をいつまでも思い続ける人はいない。先に述べたようにこうした精神の動きは「飛躍」なのである。「地球を止めてくれ、ぼくはゆっくり映画を観たい」(寺山修司)と誰もが思うだろう。ゆらぎの収束の心地よさを思いながら。

本号テーマは、イギリスには芸術思潮としてのプリミティヴィズムの欠落があるのでないか、それは 19 世紀に至るまでイギリスの言論シーンを彩った数々の宗教的議論における非国教徒の信仰の問題と関係するのではないか、ということ考えた時に遡る。この二つは実は異なる次元の問題系なのかもしれないが、原始宗教の信仰を禁忌としたイギリス国教会の信条が、数え切れないほどの出版物で語られるとき、それが原始的状態の純粹さの否定へとつながり、芸術表現に何らかの影響を与えたと考えるのもさほどの外れではないかもしれない。一見異なって見える事項の間につながるものがある—「両極端は相通ずる」(Extremes meet.—S.T.Coleridge)ということだろうか。